

高橋乗宣、浜矩子著「2012 年 資本主義経済 大清算の年になる」

東洋経済新報社 2011 年 11 月 24 日刊を読む

日本が成熟社会のお手本になる

1. 中央集権から地域が主役の時代へ

- (1) かつての日本は、輸出によって経常収支の黒字を稼いだ。一方で、資本収支は海外からの資本流入が対外資本流出を上回る関係にあった。資本輸入国だったわけである。だが、この構図がいまや大きく変わりつつある。貿易部門は経常収支の赤字要因になる一方、日本は資本輸出大国化する。そして、資本を輸出すればするほど、経常収支の所得収支が黒字化し、経常収支全体としての赤字化を阻止する要因ともなるわけだ。
- (2) 成長経済から成熟経済に転換し、債権大国として生きていくことを選択すれば、日本は TPP や FTA など、米国主導の市場囲い込み行動に追随する必要もなくなる。広い視野、大人の視点から、囲い込みではなくて分かち合いの論理をいかにグローバルな次元で実現していくかを考えていきたいところだ。そんな気構えを示す日本には、世界の支持も集まるだろう。グローバルジャングルにおける共存共栄の守護神として、いかに働くか、お役に立つか。それを追求する日本の姿を披露したいものである。
- (3) 経済のあり方が抜本的に変革することになると、当然ながら日本の社会を動かすメカニズムや運行システムも構造転換を迫られる。これまでの集権的管理の論理に代わって、「協調的分権」を軸とする経済社会への移行が上手くいくことが肝要なのだと思う。
- (4) 地方分権の議論でとかく出てきがちなのが、道州制構想である。これは都道府県を東北や関東、関西などブロックごとにくくり直すことで行政の効率を高めるという狙いがあるが、これは筆者の考える地域分権とは大きく異なる仕組みだ。そもそも道州制は国家財政と地方財政双方の危機的関係を解消する手段として考えられているものであり、集約の論理にすぎない。地域ごとの個性ある取り組みや連携は無視されているのだ。
- (5) 協調的分権の観点から参考になるのが、欧州の小国たちの生き方だ。たとえばルクセンブルクなどは人口が約 50 万人で、日本のやや大きめの市程度である。それでも国家として独立し、外部からヒト・モノ・カネを積極的に導入することで生産資源を引き寄せている。小国であっても巧みに大きな相手の力を借り、外に向かって愛嬌よく門戸を開くことで、したたかな持続力を確保している。
- (6) 日本の地域共同体が、それぞれ欧州の開かれた共同体のような手練手管を身につければ、グローバル時代を生き抜くシナリオが見えてくる。そこでは地方行政そのものの体質変化が必要となる。従来の行政は国—都道府県—市町村という縦の構図に支配されてきた。そこでは国に予算を握られているだけでなく、地域独自の展開の余地が小さい。そして地域間の横の連携もなかなか実を結んでいない。中央の意図でもあるのだろうが、縦割り・タコツボ型の構造が有

機能的な連携の結実を阻んできたのだ。

- (7) 協調的分権の時代には、それぞれの地域共同体は独立小国のつもりで自律性を高め、外に向かって開かれた政策姿勢をとる。そうした自己展開力のある開かれた地域共同体同士が横系列的に力を貸し合うという関係をつくることができれば、グローバル時代の荒波を乗り越えていくことができるに違いない。開かれた小国たちの活力が、成熟経済に活気をもたらす姿が理想だ。

2. 成熟日本の前に広がる新たな地平

- (1) グローバル時代という時代状況の中で、日本は債権大国としての成熟期に入った。ここから先は誰にとっても未体験ゾーンだ。いまや、日本の前には誰もいない。誰かをお手本にするわけにはいかない。誰にとっても、日本がお手本になる。責任重大だが、なかなか小気味のいいことでもある。
- (2) 協調的分権という新たな仕組みをうまく機能させるうえで焦点となるのが「分配」という概念だ。いくら日本が協調的分権を進めようとしても、現実のグローバルジャングルで企業や個人がサバイバルするのはきれいごとではすまない。誰かを出し抜いたり、他人からシェアを奪ったりという、やるかやられるかの競争が起こるのは世の常だ。
- (3) そして企業は他社との販売競争に勝とうとして人件費などのコストを削る。企業の論理としてはまっとうなものだが、ほかの会社も同じように人件費カットに取り組みれば、結果として労働者の賃金の下落圧力が強まるか、雇用が賃金の安い海外に流出してしまう。
- (4) そうなると国内市場での購買力も小さくなることで、企業収益が悪化し、最終的には市場が崩壊するという悪循環に陥ってしまうのだ。そうは言っても、よそが人件費削減をやっているのに自分の会社だけがやらないというのも難しい。かと言って国が企業に命じて人件費削減の禁止を強制するわけにもいかない。
- (5) そうした問題を解決するために登場するのが政策の役割だ。自由な経済活動の結果として生まれる社会的不平等や貧困問題に立ち向かう。再分配政策で弱者の痛みを緩和する。当たり前なことではあるが、この当たり前が、これまでの日本の政策展開の中では後景に退いていた。効率的で効果的な分かち合いの構図をどうつくり上げていくのか。それができるか否かで、日本の経済社会がどこまで大人になったかが測られる。
- (6) 皆さんは「バンビ」をご存知だろう。ディズニー映画の不滅の人気キャラクターだ。一頭の小鹿の成長過程を可笑しく悲しく愛らしく描いたディズニー・アニメの草分け的逸品だ。たしかにあのバンビはとても可愛い。だが、あの小鹿物語の本当に感動的なところは、映画ではなくて、原作の中にある。原作の小説は、成長したバンビが遠くから我が子を見つめているシーンで終わる。艱難辛苦を乗り越えて、酸いも甘いも噛み分けて、怖いものは何一つなくなった。そこにあるのは、威風堂々の大人の牡鹿の姿だ。ゆとりとやさしさをもって、これから自分の足跡をたどろうとしている幼子を見守っている。

(7)日本は、いままさにこの立場に立つ存在、立てる存在になっている。おっかなびっくり成長していく小鹿バンビの時代は終わった。そのゆとりある立ち居振る舞いで、グローバルジャングルの居心地のよさの守り手を務める。そんな日本になりたいものだ。なれると思う。

P178 ~ 182

[コメント]

経済危機や多くの国々の国家財政の破綻を経験しながら、1ドル 50 円の時代の国のあり方、国民生活の仕方、企業経営の仕方を今から考えておくのに参考になる著作。

－ 2011 年 12 月 13 日 林 明夫記 －